



Title	滑稽本と人情本における連体形準体法, 準体助詞について
Author(s)	蔡, 欣吟
Citation	文学研究論集, 36: 43-54
URL	http://hdl.handle.net/10291/16085
Rights	
Issue Date	2012-02-29
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

滑稽本と人情本における連体形準体法、 準体助詞について

The Quasi-nominal Form and NO-Pronominalization in the late Edo Era:

Focusing on Kokkeibon and Ninjōbon (1809~1834)

博士後期課程 日本文学専攻 2010年度入学

蔡 欣 吟

TSAI HsinYin

【論文要旨】

連体形準体法の消滅及び準体助詞ノの出現は古代語と現代語との間に起きた大きな変化である。準体助詞ノの活用語の連体形への接続が確立したのは室町末、あるいは江戸初期ごろと推定されており、その後使用が一般化したと見られる。本稿は、江戸末期の滑稽本『浮世風呂』『浮世床』『梅暦八笑人』及び人情本『春色梅児誉美』『仮名文章娘節用』を資料に、「連体形準体法」、「準体助詞ノ」の使用状況について、調査分析を行う。それにより、江戸末期において、「連体形準体法」と「準体助詞ノ」それぞれの使用にどのような特徴があるのか、どのような棲み分けをしているのかを明らかにすることが目的である。

『浮世風呂』『浮世床』『梅暦八笑人』『春色梅児誉美』『仮名文章娘節用』における連体形準体法と準体助詞ノを調査分析した結果、①作品のジャンルによって準体助詞ノの使用に差異がある、②連体修飾構文から見ると、準体助詞ノは「外の関係」より「内の関係」においての使用率が高く、連体形準体法の有する機能が衰退していることが考えられる、③前件構成が単調な形態では連体形準体法の比率が高い、④活用語に助動詞や補助動詞を付加して使用される形態のうち、過去の事態を表す助動詞「た」、丁寧を表す助動詞「ます」に準体助詞ノが接続する比率が高いこと、がわかった。

【キーワード】 連体形、準体法、準体助詞、滑稽本、人情本

1 はじめに

現代日本語においては一部の慣用句や慣用表現を除いて、活用語の連体形に準体助詞¹ノや形式名詞、一般名詞などが付加されることにより、体言句となって格助詞や係助詞に接続する。だが、近世までは活用語の連体形は、準体助詞や名詞を伴うことなく連体形のみで体言句を構成できた。この現象は、山田文法では「準体言」と名付けられ、「ここに準体言といへるものは用言の連体形を以て体言の資格に立たしめて使用せるものをいふ²」と定義されている。本稿では他の諸先学に従い、これを活用語の「連体形準体法」と称する。

連体形準体法と準体助詞ノに関する先行研究には、吉川泰雄（1950）、中山崇（1950）、信太知子（1970、1976、1987、1996）、柳田征司（1993）などが挙げられる。連体形準体法の消滅と準体助詞ノの起源について巨視的に調査分析が行われており、準体助詞ノに取って代わられた連体形準体法の消滅について論述されている。しかしながら、近世・近代語から現代語へと変化した時期において、連体形準体法と準体助詞ノがどのような棲み分けをして、現代語に定着していったのかについてはさらなる調査が必要だと思われる。

蔡（2011、以下「前稿」と呼ぶ）では、『浮世風呂』における活用語の連体形、準体法、準体助詞の有様について全数調査を行い、具体的な使用状況の分析を試みた。その結果、連体形準体法の衰退期と思われる江戸末期において、準体助詞ノが日常会話から一般化してきたこと、準体助詞ノが地の文で使用されないのは文語に接続しないためだと考えられること、準体助詞ノは江戸末期では女性による使用が男性を大幅に上回っており、男女とも上層の使用者が極めて少ないこと、といった結果が得られた。本稿ではさらに調査資料の数量とジャンルを増し、主に連体形準体法と準体助詞ノの使用される文の構成に着目することで、江戸末期における連体形準体法と準体助詞ノの使用状況を調査分析し、両者の相違と使用の傾向を見出すことを目的とする。

2 調査対象

前稿では「連体形準体法」、「準体助詞ノ」、「連体形＋名詞」の三者を対象として調査を行った。本稿では調査対象を連体形準体法と準体助詞ノにしぼって、活用語の連体形準体法と準体助詞ノの使用例を収集する。前稿と同様に、活用語とは、用言（動詞、形容詞、形容動詞）および助動詞を指す。ただし、「ぞ」「なむ」「や」（反語）「か」などの係助詞による、いわゆる係り結び文に見られる活用語の連体形については、現代語には存在せず、また、それに取って代わって使用されている用法や形態もないため、形式上は連体形であるが、今回の調査の対象としない。また、文末述部および断定の助動詞に由来する「ナラ」「ナレバ」「ナレドモ」なども扱わない。さらに、連体形に

¹ 準体助詞という用語は橋本文法に従う。

² 山田孝雄（1908）『日本文法論』771頁

順接確定表現「カラ」および接続表現「ガ」が下接する場合、古語では連体形につくが、現代語では「ダカラ」「ダガ」のように、形態上では終止形接続が見られる。そこで、用例基準の不一致を回避するため、順接確定表現「カラ」および接続表現「ガ」を調査対象から除外する。

また、前稿では活用語の「連体形準体法」、「準体助詞ノ」、「連体形+名詞」三者の全数調査を行い、調査項目の一つとして、それぞれの後接要素を観察した。その結果、副助詞群は「連体形準体法」と「連体形+名詞」にはつくが、準体助詞ノにつかないことが見られた。今回の調査でも「準体助詞ノ」につく用例がない。副助詞がつくか否かは、連体形準体法と準体助詞ノの相違点として注目することではあるが、この両者が共存し拮抗する状態から、準体助詞ノが優勢に立つ過程を探るにあたって、両者の使用に影響を及ぼす項目に焦点を当てるべきだと考えたため、今回の調査では、副助詞が活用語の連体形準体法と準体助詞ノに下接する使用例を除外することにした。

3 調査資料

今回使用した資料は、滑稽本『浮世風呂』『浮世床』『花暦八笑人』、人情本『春色梅児誉美』『仮名文章娘節用』の五作品である。以下、各資料の性格及び調査テキストについて、刊行年代順に簡単に触れておく。

『浮世風呂』(以下『風呂』と略す)(文化六～十(1809～1813)年)と『浮世床』(以下『床』と略す)(文化十～文政六(1813～23)年、調査対象は三馬の手になる初編と二編のみ)は式亭三馬の滑稽本であり、江戸庶民の生活を忠実に示すもので、言語資料として価値が高いとされている。ただし、『床』には笑いをとることが目的と思われる市子の口寄せの部分があり、それには使用言語に偏りのあることが考えられたため、それらの部分を除外した。『風呂』は岩波書店『日本古典文学大系 63』を、『床』は小学館『新編日本古典文学全集 80 洒落本 滑稽本 人情本』を使用する。

『花暦八笑人』(以下『八笑人』と略す)は文政三～嘉永二(1820～1849)年刊行の滑稽本で、全五編である。四編追加の部分までは瀧亭鯉丈作、五編は一筆庵主人(浜斎英泉)、与鳳亭枝成作。調査対象とするのは瀧亭鯉丈作の四編追加までで、刊行年代は1820～1834年である。テキストは岩波文庫を使用する。

『か な ま じ り む す め せ つ よ う仮名文章娘節用』(以下『娘節用』と略す)は天保二～五(1831～34)年刊の人情本で、全三編。作者が曲山人という説もあり、また、曲山人が写本を補綴したという説もある。勸善懲惡風の人情本で、人情本中の代表作の一つとされる。言語資料としての価値について、『国語学研究事典』では「全体としてはほぼ完成された江戸語の姿を見ることができると述べている。テキストは『近代文学大系 第21巻 人情本代表作集』及び鶴見人情本読書会編の「翻刻『仮名文章娘節用』」を併用する。用例収集の際に、両テキストに相違がある場合、鶴見人情本読書会編の翻刻資料に従う。

『春色梅児誉美』(以下『梅』と略す)は天保三～四(1832～33)年に刊行された為永春水作の

人情本で、江戸の花柳界を描いた写実的風俗小説である。調査テキストは、岩波書店『日本古典文学大系 64』を使用する。

以上の五作品を資料とした理由としては、まず、作者がすべて江戸出身であるため、地域による言語使用の差が見られないこと、刊行年代が1809～1834年の間に集中しており、共時的な言語状況の観察に適していると考えられること、滑稽本と人情本という二つのジャンルから用例を採集することで、ジャンル間の比較が可能となることが挙げられる。なお、本来ならば、直接、板本に就くべきであるが、今回は便宜に従うこととしたい。

4 連体形準体法と準体助詞ノの使用状況

今回連体形準体法と準体助詞ノを調査するにあたっては、地の文と発話文とを分けて考察する。ここで発話文とは、2人もしくは2人以上による会話及び独り言を指す。地の文と発話部分にある引用、歌などの類は前稿ではその他として用例数を提示したが、今回は地の文と発話文のみに注目するため、用例数の提示を省く。

4.1 全体の使用状況

連体形準体法と準体助詞ノの全体の使用数には差が見られるが、これは各作品の分量が異なっているためである。以下、地の文と発話文それぞれの特徴について述べる。表1に地の文を、表2に発話文を示す。

表1 地の文における連体形準体法³と準体助詞ノ⁴

	地の文					
	風呂	床	八笑人	娘節用	梅	小計
準体法	76	40	49	129	122	416
準体助詞	0	0	0	4	2	6

まず、地の文から見ていく。

地の文では連体形準体法は416例、準体助詞ノは6例ある。文中に現れる活用語連体形による体言句は主として連体形準体法が担っているといえる。それに対して、準体助詞ノはわずか6例で、『娘節用』で4例、『梅』で2例使用されている。それらの用例を以下に示す。(本稿で挙げる用例の下線部は活用語部分を表す)

³「連体形準体法」は全ての表の中で「準体法」で表す。

⁴「準体助詞ノ」は全ての表の中で「準体助詞」で表す。

- #1 トぐちをいふのもことわりなり。(娘節用, 三中)
- #2 退屈らしくふさぐのを, 見るにつけ又白翁は, (娘節用, 三中)
- #3 愚痴になるのも道理なり。(娘節用, 三下)
- #4 身のおこなひを, あらためるのも小三の貞心, (娘節用, 三下)
- #5 そのぜんせいより自腹の我まゝ, のろけたいのが歌妓の樂屋 (梅, 初三)
- #6 たゞあどけなく花やかに, わけのないのが花にして, (梅, 後六)

#3～#6を見ると、これらの準体助詞ノの使用は七五調のリズムに合わせようとしたためのものだと考えられる。丸山茂（1978）では、春水は、「歌の引用が多く、さらにはそれは歌学への関心に及んでいる」と述べられている。人情本の地の文は、また、歌舞伎等の演劇のセリフ回しの影響も見られるので、そのようなリズムによって、地の文であっても準体助詞ノの使用が許されているのではないと思われる。『風呂』『床』『八笑人』で準体助詞ノの使用がないのに対して、『娘節用』『梅』では少数ながら使用が見られるのは、上述したように資料のジャンルとその文体による差異が関係する可能性がある。準体助詞ノの用例数が少ないことから、地の文では基本的には一定の品格が維持されるため準体助詞ノを使用しないが、時にはリズムを重視することで、準体助詞ノが取り入れられ、品格から逸した表現が用いられると考えられる。さらに、滑稽本と人情本の差異は発話文からもうかがえる。

発話文における使用数は以下の表2である。

表2 発話文における連体形準体法と準体助詞ノ

	発 話 文					
	風 呂	床	八笑人	娘節用	梅	小 計
準体法	195	113	194	169	93	764
準体助詞	64	35	56	76	64	295
準体助詞の使用率	24.7%	23.6%	22.4%	31.0%	40.8%	27.9%

発話文では、連体形準体法は764例、準体助詞ノは295例用いられる。連体形準体法の使用が優勢であるのは、地の文と同じ傾向を示している。しかし、地の文での準体助詞ノがわずか6例であるのに対して、発話文では準体助詞ノの使用が3割ほどを占めている。この時期、庶民階級や女性の実際の言語生活においては、準体助詞ノがすでにある程度浸透しているということがいえる。各作品における準体助詞ノの使用率を見ると、『風呂』『床』『八笑人』では2割前半であるのに対して、『娘節用』『梅』ではそれぞれ3割と4割となっている。ジャンルとしては、滑稽本より人情本のほうで準体助詞ノの使用が多いという傾向が認められる。これは、滑稽本と人情本とで、登場する人物の階層に差があることも関わっている可能性がある。

以上のことをまとめると、連体形準体法がこの時期では優勢であること、ジャンルによって、準体助詞ノの使用数に偏りがあること、滑稽本より人情本のほうで準体助詞ノが多用されることがわかった。

4.2 「内の関係」と「外の関係」から見る連体形準体法と準体助詞ノ

連体修飾構文から連体形準体法と準体助詞ノを見てみる。

寺村（1975）では修飾部と被修飾部（底の名詞ともいう）の関係によって、連体修飾構文を「内の関係」と「外の関係」に分ける。被修飾部が格助詞をつけて修飾部と結びつくこと、つまり、修飾部に納めることができるような連体修飾関係を「内の関係」、これに対して、被修飾部を修飾部に納めることができない関係を「外の関係」と呼ぶ。江戸末期の五作品における連体形準体法と準体助詞ノの使用例を、「内の関係」と「外の関係」に分けて使用上の特徴を探ってみる。以下、各種類の連体修飾構文の例を挙げる。#7は「内の関係」の連体形準体法の例文で、#8は「内の関係」の準体助詞ノの例文である。また、#9は「外の関係」の連体形準体法の例文で、#10は「外の関係」の準体助詞ノの例文である。

#7 懐より塵紙の折たるを出し、（八笑人、四追加上）

#8 わたしが見たのは家橋羽左エ門ネ。（古左エ門→きも右エ門）（風呂、四下）

#9 自慢をするも無利ちやアねへ（30才、婆文字→21, 2才、おはね）（風呂、三上）

#10 時節をまつのが楽のたね、（紫雲→小三）（娘節用、三中）

以上#7～#10の修飾部は、それぞれ下線を引いた活用語の部分となる。被修飾部（底の名詞）に関しては、#7と#9の連体形準体法では活用語連体形が体言の働きを果たしていることから、修飾部と同じ部分である。それに対して、#8と#10では準体助詞ノが活用語連体形の修飾を受け、被修飾部となる。

連体修飾構文から『風呂』『床』『八笑人』『娘節用』『梅』における連体形準体法と準体助詞ノを観察する。前述したように、地の文では準体助詞ノはわずか6例で、そのうち、「内の関係」は2例、「外の関係」は4例である。用例数が少ないため、用例数の提示にとどめる。発話文に見られる「内の関係」は表3、「外の関係」は表4である。

表3 発話文における「内の関係」構文の用例数

	準体法	準体助詞	準体助詞の使用率
風呂	20	22	52.4%
床	11	22	66.7%
八笑人	27	25	48.1%
娘節用	15	13	46.4%
梅	15	8	34.8%
小計	88	90	50.6%

表4 発話文における「外の関係」構文の用例数

	準体法	準体助詞	準体助詞の使用率
風呂	175	42	19.4%
床	102	13	11.3%
八笑人	167	31	15.7%
娘節用	154	63	29.0%
梅	78	56	41.8%
小計	676	205	23.3%

準体助詞ノの使用率に注目する。発話文での平均使用率は、「内の関係」の類では準体助詞ノの使用率が5割ほどあるのに対して、「外の関係」の類ではわずか2割ほどである。つまり、準体助詞ノは「外の関係」より「内の関係」における使用率が高い。

ここで、再び「外の関係」と「内の関係」の二種類の連体修飾構造を見る。「外の関係」と「内の関係」に関しては、寺村（1975）で次のように述べられている。

「外の関係」においては、修飾部は底の名詞の内容を表す、または少なくともその内容に関わるものであるのに対し、「内の関係」では、修飾部は、底の名詞を「特定」するには違いないけれども、その内容には関わらない。

この観点から、「外の関係」では連体形準体法の勢力が依然として準体助詞ノを大幅に上回るが、「内の関係」では一足早く準体助詞ノを取り入れる、ということについて考えてみたい。

「外の関係」は、修飾部（#9では「自慢をする」、#10では「時節をまつ」）が被修飾部を表すものである。連体形準体法が衰退している時期においても、依然として被修飾部の役割を担う力を持ち、準体助詞ノのような指標やマークがなくても、一つの事柄として識別されうる。それに対して、「内の関係」は、被修飾部が、格助詞をつけて修飾部（#7では「折たる」、#8では「見た」）と結びつき、修飾部に納めるものである。被修飾部が修飾部に納められて、一つの事柄として完成

することから、被修飾部と修飾部の関係性が強いと考える。本来連体形準体法が持っていた指標としての力が衰退したため、準体助詞ノを利用したことから、準体助詞ノが被修飾部のマークとして浸透しはじめたと考えられる。したがって、「内の関係」と「外の関係」では、準体助詞ノの使用率に差が見られるのである。

しかしながら、江戸末期では連体形準体法が衰退してはいても、完全に片方のみ使用されることになったわけではない。次に、連体形準体法と準体助詞ノの前件活用語の部分の構成から、両者の使用上の相違を探ってみる。

4.3 前件構成から見る連体形準体法と準体助詞ノ

4.3.1 前件構成の分類

まず、前件構成の分類方法を述べる。ここでいう前件は、連体形準体法と、準体助詞ノがつく活用語の部分を目指す。前件構成を見ることで、活用語にどのような成分が含まれているかがわかるのである。前件構成を大きくA類とB類に分け、それぞれの定義と今回の調査で見られたパターンを以下に示す。

A類：活用語の部分が、動詞、形容詞、形容動詞+ナ（またはナル）で、活用語連体形として最小成分を持つもの。活用語連体形としての最小成分を持ち、複数の構成要素を持たないものと、複数の構成要素を有する活用語のもの（例えば、複合動詞の類）があるが、今回の調査では複合動詞が10例のみであるため、全てA類として扱い、仮に単形と呼ぶことにする。

- ① 単形：思う、早い、大きな、取り上げる

B類：A類以外のもの、つまり、動詞、形容詞、形容動詞に助動詞、補助動詞がつき、使用されるもの。今回の調査範囲内で見られたパターンは以下のとおりである。助動詞を で、補助動詞を~~~~~~~~で示す。

- ② V+助動詞：おっしゃった
- ③ V+助動詞+助動詞：とられぬ
- ④ V+助動詞+助動詞+助動詞：出来ましたらう
- ⑤ V+助動詞+補助動詞：のみこませておく
- ⑥ V+補助動詞：お話申す、廻つてくる
- ⑦ V+補助動詞+助動詞：おかくしなすつた
- ⑧ V+補助動詞+助動詞+助動詞：引込んでおりました
- ⑨ V+補助動詞+補助動詞：なって居なさる
- ⑩ Adj+助動詞：悪かつた

A類の構成が短くて単調であるのに対して、B類にはテンス、アスペクト、ムードなどの付加的要素が含まれ、比較的複雑な構成をしている。以上の分類をもとに、前件の構成が連体形準体法と準体助詞ノの使用にどのように影響するのかを観察する。

4.3.2 前件構成から見る使用状況

4.3.1で述べた分類方法に従い、発話文における連体形準体法と準体助詞ノの分布状況をまとめると、以下の表5のようになる。なお、4.2と同様、地の文においては準体助詞ノの用例数がきわめて少ないため、発話文における使用のみを考察の対象とする。

表5 発話文における連体形準体法と準体助詞ノの前件構成別の使用状況

		準体法	準体助詞	準体助詞の使用率
A類	① 単形	519	167	24.3%
	② V+助動詞	137	90	39.6%
B類	③ V+助動詞+助動詞	27	9	25.0%
	④ V+助動詞+助動詞+助動詞	3	0	0.0%
	⑤ V+助動詞+補助動詞	1	0	0.0%
	⑥ V+補助動詞	66	16	19.5%
	⑦ V+補助動詞+助動詞	9	9	50.0%
	⑧ V+補助動詞+助動詞+助動詞	1	2	66.7%
	⑨ V+補助動詞+補助動詞	0	1	100.0%
	⑩ Adj+助動詞	1	1	50.0%
B類小計		245	128	34.3%

A類単形に準体助詞ノがつく比率が約24%であるのに対して、B類全体での準体助詞ノの使用率は約34%（補助動詞の例を除くと約38.3%）であり、A類よりB類のほうが準体助詞ノの使用率が高い。つまり、単調な活用語より、活用語に助動詞や補助動詞が付加している形態のほうに、準体助詞ノが付きやすいことになる。ここからは、複雑な形態を持つ活用語連体形が体言として働く場合、準体助詞ノが必要成分として使用されやすいということがうかがえる。それに対して、活用語の単調な形態では、連体形準体法は体言の役割を果たすことができる。

また、B類各下位分類における準体助詞ノの分布状況では、用例数が少ないため断言はできないが、活用語の語尾が助動詞の場合は、補助動詞の場合より準体助詞ノが多用される。A類と併せて考えると、助動詞を語尾に有する活用語の形態には準体助詞ノが比較的つきやすいこととなる。付加要素の多さ（活用語連体形部分の長さ）の影響に関しては、付加要素が多いほど準体助詞ノが多用されるというわけではない。

B類における具体的に使用された種類の内訳を、用例数の多い順に10位まで示すと、以下の表6

となる（10位以下については別表を参照）。表6のパターン欄で、Tはテンス、Mはムード、Vはヴォイス、Aはアスペクト、αはその他、を表す。

表6 B類の使用パターン

順位	種類	用例数	分類	パターン	準体法	準体助詞	準体助詞の使用率
1	V+た	114	②	過去 T	58	56	49.1%
2	V+ない	33	②	打消 M	24	9	27.3%
3	V+ている	26	⑥	A	17	9	34.6%
4	V+ます	23	②	丁寧 M	13	10	43.5%
5	V+ぬ	18	②	打消 M	13	5	27.8%
6	V+れる	13	②	受身 V	12	1	7.7%
7	V+ます+た	8	③	丁寧 M+過去 T	5	3	37.5%
7	V+せる	8	②	使役 V	6	2	25.0%
7	V+てくる	8	⑥	A	6	2	25.0%
7	V+ておく	8	⑥	α	7	1	12.5%

B類全373例のうち、10例以上の使用があるものは助動詞「た」「ない」「ます」「ぬ」「れる」及び補助動詞「ている」である。それらを準体助詞ノの使用率の高い方から並べると、「た」「ます」「ている」「ぬ」「ない」「れる」の順となる。連体形準体法と準体助詞ノには以下の使用傾向が見られる。

- ① B類のなかで使用数と使用率が一位を占める「V+た」114例のうち、過去の事態を表すものは96例あるが、そのほかに、「～たガ（ハ）いい」という忠告・放任のような慣用表現が19例ある。この19例を除外して考えると、過去の事態を表す助動詞「た」には、準体助詞ノがつく使用が、連体形準体法を上回る。
- ② 丁寧を表す助動詞「ます」に準体助詞ノがつく使用率は比較的に高い。「ます」に準体助詞ノが接続する使用が進んでいることがうかがえる。
- ③ 打消の助動詞「ない」と「ぬ」は両方使用されるが、僅差ではあるが、「ぬ」における準体助詞ノの使用率が高い。

5 まとめ

本稿では、江戸末期の滑稽本『浮世風呂』『浮世床』『梅暦八笑人』、人情本『春色梅児誉美』『仮名文章娘節用』を資料として、連体形準体法と準体助詞ノの使用状況について、調査分析を行った。その結果、全体における顕著な特徴として、以下のことが明らかになった。

- ① 地の文では、準体助詞ノの使用が少数ながら見られる。発話文においては3割ほど用いられる。連体形準体法はこの時期では優勢であるが、準体助詞ノが浸透している。ジャンルおよび

文体によって、準体助詞ノの使用数に偏りがあり、今回の調査では滑稽本より人情本のほうでは準体助詞ノが多用されることがわかった。

- ② 「内の関係」と「外の関係」という連体修飾構文の観点から検討すると、発話文では準体助詞ノは「外の関係」より「内の関係」においての使用率が高い。それは、連体形準体法の持つ体言の役割を果たすという指標の力に関係する。連体形準体法の持つ力が衰え、準体助詞ノの力が比較的に必要な「内の関係」では準体助詞ノの使用が進んでいると考える。
- ③ 前件の構成を活用語連体形として最小成分を持つもの(A類)と、さらにそれらに助動詞、補助動詞が付加されて使用されるもの(B類)に分けて、それぞれの使用状況を観察した結果、B類よりA類のほうでは連体形準体法の使用率が高い。また、全体的には助動詞を語尾に有する活用語の形態に準体助詞ノが比較的つきやすい。
- ④ B類の使用状況を詳しく見ると、過去の事態を表す助動詞「た」、丁寧を表す助動詞「ます」に準体助詞ノが接続して使用する比率が高い。

今回は主に連体修飾関係及び前件構成要素といった観点から、江戸末期の資料『浮世風呂』『浮世床』『梅暦八笑人』『春色梅児誉美』『仮名文章娘節用』における連体形準体法と準体助詞ノの使用傾向を調べてみた。江戸末期において、準体助詞ノの浸透は各方面から進行しており、また、様々な要素に影響されていると考えられる。今後さらに後件の構成状況、発話文における登場人物による両表現の使用傾向などの観点から、細かく分析・考察することも必要になる。

参考文献

- 蔡 欣吟 (2011) 『『浮世風呂』における連体形、準体法、準体助詞について』『文学研究論集第34号』 明治大学大学院文学研究科
- 佐藤喜代治編 (1977) 『国語学研究事典』 明治書院
- 信太知子 (1970) 「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』 82
- (1976) 「準体助詞「の」の活用語承接について—連体形準体法の消滅との関連—」『立正女子大 国文』 5
- (1987) 『『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—』『近代語研究』 7 武蔵野書院
- (1996) 「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大 国文』 第7号
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味」『寺村秀夫論文集 I—日本語文法編—』所収 くろしお出版
- 中山 崇 (1950) 「準体助詞「の」の通時的研究—特に活用言につく場合について—」『日本文学教室』 2 蒼明社
- 丸山 茂 (1978) 『春水人情本の研究』 桜楓社
- 柳田征司 (1993) 「無名詞体言句から準体助詞体言句(「白く咲けるを」から「白く咲いているのを」)への変 化」『愛媛大学教育学部紀要 第Ⅱ部人文・社会科学』 第25巻 2号
- 吉川泰雄 (1950) 「形式名詞『の』の成立」『日本文学教室』 3 蒼明社

別表 前件構成 B 類の全使用種類

種 類	用例数	分類	パ タ ー ン	準体法	準体助詞	準体助詞の使用率
た	114	②	過去 T	58	56	49.1%
ない	33	②	打消 M	24	9	27.3%
ている	26	⑥	A	17	9	34.6%
ます	23	②	丁寧 M	13	10	43.5%
ぬ	18	②	打消 M	13	5	27.8%
れる	13	②	受身 V	12	1	7.7%
ます+た	8	③	丁寧 M+過去 T	5	3	37.5%
せる	8	②	使役 V	6	2	25.0%
てくる	8	⑥	A	6	2	25.0%
ておく	8	⑥	α	7	1	12.5%
てみる	6	⑥	α	6	0	0.0%
なさる	6	⑥	尊敬 M	6	0	0.0%
もうす	5	⑥	謙譲 M	4	1	20.0%
れる+た	5	③	受身 V+過去 T	4	1	20.0%
ます+ぬ	6	③	丁寧 M+打消 M	6	0	0.0%
れる+ぬ	5	③	受身 V+打消 M	5	0	0.0%
なさる+た	4	⑦	尊敬 M+過去 T	2	2	50.0%
てくれる	4	⑥	授受	3	1	25.0%
てやる	4	⑥	授受	4	0	0.0%
まい	3	②	打消推量 M	1	2	66.7%
たい	3	②	希望 M	2	1	33.3%
てしまう+た	3	⑦	A+過去 T	2	1	33.3%
れる+ます	3	③	可能 V+丁寧 M	2	1	33.3%
やがる+た	3	③	軽蔑 M+過去 T	3	0	0.0%
てくる+た	2	⑦	A+過去 T	0	2	100.0%
あそばす	2	⑥	尊敬 M	1	1	50.0%
う	2	②	推量 M	1	1	50.0%
せる+た	2	③	使役 V+過去 T	1	1	50.0%
てある	2	⑥	A	1	1	50.0%
ます+まい	2	③	丁寧 M+打消推量 M	1	1	50.0%
Adj+た	2	⑩	過去 T	1	1	50.0%
し	3	②	過去 T	3	0	0.0%
たる	2	②	過去 T	2	0	0.0%
ていく	2	⑥	A	2	0	0.0%
てしまう	2	⑥	A	2	0	0.0%
てもらう	2	⑥	授受	2	0	0.0%
なんだ	2	②	過去 T+打消 M	2	0	0.0%
れる+ます+た	2	④	受身 V+丁寧 M+過去 T	2	0	0.0%
給う	2	⑥	尊敬 M	2	0	0.0%
さっしやる	1	②	尊敬 M	0	1	100.0%
そう	1	②	様態 M	0	1	100.0%
たがる	1	②	希望 M	0	1	100.0%
てあげる+た	1	⑦	授受+過去 T	0	1	100.0%
ている+さっしやる	1	⑦	A+尊敬 M	0	1	100.0%
ている+なさる	1	⑨	A+尊敬 M	0	1	100.0%
ておる+ます+た	1	⑧	A+丁寧 M+過去 T	0	1	100.0%
てくる+さっしやる	1	⑦	A+尊敬 M	0	1	100.0%
てくる+ます+た	1	⑧	A+尊敬 M+過去 T	0	1	100.0%
てまいる+た	1	⑦	謙譲 M+過去 T	0	1	100.0%
れる+さっしやる	1	③	受身 V+尊敬 M	0	1	100.0%
れる+ない	1	③	受身 V+打消 M	0	1	100.0%
いたす	1	⑥	謙譲 M	1	0	0.0%
おる+ぬ	1	⑦	A+打消 M	1	0	0.0%
せる+ておく	1	⑤	使役 V+α	1	0	0.0%
ている+た	1	⑦	A+過去 T	1	0	0.0%
ている+た+う	1	⑧	A+過去 T+推量 M	1	0	0.0%
ている+ぬ	1	⑦	A+打消 M	1	0	0.0%
ておる	1	⑥	A	1	0	0.0%
てみる+た	1	⑦	α+過去 T	1	0	0.0%
なさる+ない	1	⑦	尊敬 M+打消 M	1	0	0.0%
ます+た+う	1	④	丁寧 M+過去 T+意志 M	1	0	0.0%
奉る	1	⑥	謙譲 M	1	0	0.0%